

一般他者を想定した愛着スタイル尺度の信頼性と妥当性の検討

中尾, 達馬
九州大学大学院人間環境学府

加藤, 和生
九州大学大学院人間環境学研究院

<https://doi.org/10.15017/3567>

出版情報：九州大学心理学研究. 5, pp.19-27, 2004-03-31. 九州大学大学院人間環境学研究院
バージョン：
権利関係：

“一般他者”を想定した愛着スタイル尺度の信頼性と妥当性の検討¹⁾

中尾 達馬²⁾ 九州大学大学院人間環境学府
加藤 和生 九州大学大学院人間環境学研究院

Examining reliabilities and validities of adult attachment scales for “the generalized other”

Tatsuma Nakao (*Graduate school of human-environment studies, Kyushu university*)

Kazuo Kato (*Faculty of human-environment studies, Kyushu university*)

This study examined reliabilities and validities of adult attachment style scales for “the generalized other” (ECR-GO, RQ-GO). 378 college students participated in Study 1, and 77 college female students participated in Study 2. In Study 1, we examined (1) reliability of ECR-GO by α coefficients and factor comparison between ECR-GO and ECR, (2) validity of ECR-GO by correlations between ECR-GO and three scales theoretically related to Self- and Others- views (e.g., Self-esteem scale; Rosenberg, 1965), (3) whether the patterns of the distribution of 4 attachment styles classified by RQ-GO differ by the types of attachment figures rated for (ECR-GO, RQ-GO). In Study 2, we examined 1 month test-retest reliabilities of ECR-GO and RQ-GO: By examining (1) correlations between Time 1 and Time 2 (for both scales), and (2) a cross table of 4 attachment styles classified by RQ-GO on the 2 times. The results of the two studies demonstrated that ECR-GO and RQ-GO have good psychometric properties in reliabilities and validities.

Keywords: Adult attachment style, the generalized other version, ECR, test-retest reliability and validity, RQ

Hazan & Shaver (1987) は、恋愛を愛着プロセス (romantic love as a process of becoming attached) であると概念化した。そのため、その後の成人愛着研究では、恋愛対象への愛着スタイル³⁾を測定することが重要な課題となった。実際、今日までに恋人を対象とした愛着スタイル尺度が数多く開発されてきた (Brennan, Clark, & Shaver, 1998)。だが、現在、多項目式の尺度としては“親密な対人関係体験尺度 (Brennan et al., 1998), ECR と略す⁴⁾”が、規準的な測度となりつつある。というのは、ECR は、今までに開発された愛着スタイル尺度 (60 の下位尺度) を踏まえて作成されており、その信頼性と妥当性も十分確認されてきているからだ。そのため、今やほとんどの研究者がこの尺度を用いるようになっている (e.g., Fraley, Garner, & Shaver, 2000)。一方、日本では、中尾・加藤 (2002) がその日本語版を作成し、その信頼性と妥当性を検討するところまで来ているのが、ECR に関する現状である。

だが、加藤 (1998/99) が指摘するように、初対面の段階から対人関係を形成していく場面、親密さが明確でない状況で愛着行動を行う場面、あるいは対人場面で他者とストレスのかかるやりとりをしなければならない場面で、他者との相互作用パターンを予測することは、従来の恋人を対象とした愛着スタイル尺度 (例えば、ECR) では困難であろう。むしろ、一般化された他者

¹⁾ 本研究は、科研・基盤研究(B-2)一般(代表:加藤和生, H13-15年度, 課題番号: 13410039)の援助を受けて行われました。また、本研究の1部は、九州心理学会第62回大会(佐賀医科大学)、日本教育心理学会第44回総会(熊本大学)、日本心理学会第67回大会(東京大学)、において発表を行いました。

²⁾ 本研究を行うにあたりご指導下さいました九州大学丸野俊一先生、京都大学遠藤利彦先生に心より感謝申し上げます。また、本研究を行うにあたりいろいろとご協力・アドバイスを頂きました笠原正洋先生、假屋園昭彦先生、藤田敦先生、研究室の皆様方に心より感謝申し上げます。最後に、調査にご協力下さいました被験者の皆様方ご協力ありがとうございました。この論文への問い合わせ先は以下の通り: nakaedu@mbox.nc.kyushu-u.ac.jp

³⁾ 3分類ではなく4分類愛着スタイル尺度を用いる理由や多項目式だけでなく強制選択式の尺度が必要な理由の詳細については、中尾・加藤 (2003) で論じた。なお、4分類尺度は、Bartholomew & Horowitz (1991) の2次元・4分類愛着スタイルモデルに従っている。このモデルでは、“自己観 (自己についての内的作業モデル (Internal working models))”と“他者観 (他者についての内的作業モデル)”がそれぞれポジティブかネガティブかにより4つの愛着スタイルを構成する。具体的には、(1)安定型 (Secure) は自己観と他者観がともにポジティブなスタイル、(2)拒絶型 (Dismissing) は自己観がポジティブで他者観がネガティブなスタイル、逆に(3)とらわれ型 (Preoccupied) は自己観がネガティブで他者観がポジティブなスタイル、最後に(4)恐れ型 (Fearful) は自己観と他者観がともにネガティブなスタイルである。

⁴⁾ ECR は、“the Experiences in Close Relationships inventory”の略である (Brennan et al., 1998, p.69)。

(以下、一般他者と略す)を想定させ回答させる愛着スタイル尺度が新たに必要となるのではないだろうか(こうした観点からの適用例は、加藤・丸野, 1997)。実際、こうした観点から“関係尺度 (Bartholomew & Horowitz, 1991), RQ-GO と略す⁵⁾”の日本語版の作成は、既になされている(加藤, 1998/99)⁶⁾。しかし、RQ-GOは強制選択式であるために、愛着スタイルと他の変数の相関関係を捉える数量的分析には適していない(e.g., 中尾・加藤, 2003)。こうした問題を解決するためには、多項目式の尺度を作成する必要がある。

そこで、本研究では、ECRの一般他者版(以下、ECR-GOと略す⁷⁾)を作成し、その信頼性と妥当性を検討する。なお、一般他者を想定させ愛着スタイルを測定しようとする多項目式尺度の作成の試みは、すでに1部ではなされている⁸⁾。だが、ここで敢えてECRを取り上げることの理由は、はじめに述べた通り、この尺度が現在規準的なものと見なされつつあるためである。

さて、対象を一般他者とする場合に、1つ確認しておかなければならない問題がある。それは、愛着スタイルを査定する際に、その対象として一般他者を想定することが本当に可能なのかという問題である。例えば、人格検査の場合は、被験者には回答に際して一般他者を念頭におきながら評定させる。Big Five尺度(和田, 1996)の場合、“社会的”や“陽気な”という項目が自分自身にどのくらい当てはまるのかと問われれば、被験者は一般他者あるいは一般的・全般的状況を念頭におきながら評定を行うであろうと考えられている。

⁵⁾ “関係尺度 (Relationship Questionnaire, Bartholomew & Horowitz, 1991, p.229) は、通常、RQと略される。RQはもとも愛着対象として一般他者を想定した尺度であるが、愛着対象を特定対象(e.g., 恋人)に修正することにより、特定対象に関する愛着スタイル尺度としても用いられる(e.g., Brennan et al., 1998)。そのため、本研究では、一般他者を想定したRQについては、RQ-GO (Relationship Questionnaire-the-generalized-other-version)とする。

⁶⁾ RQ-GOは、愛着スタイルを4つの群に分類する際に適しており(e.g., 中尾・加藤, 2003)、現段階では、その妥当性が、日本においても既にある程度確認されている。例えば、社会的適応性(金政・大坊, 2003; 北村・竹内・岸田・蓮井, 2002)、自尊感情(加藤, 1998/1999; 丸山, 1998)、他者観(加藤, 1998/1999)、“多項目式関係尺度 (RSQ (the Relationship Scales Questionnaire) と略す, Griffin & Bartholomew, 1994; 中尾・加藤 (2003) 訳)”との関連において妥当性が示されている。

⁷⁾ ECR-GOは、“the Experiences in Close Relationships inventory-the-generalized-other-version”の略である。

⁸⁾ 日本には一般他者を想定した多項目式尺度として、日本語版RSQ(中尾・加藤, 2003)や大石・宇恵(1999)が開発したMAQ (Multi-item Attachment Questionnaire)がある。だが、ECRが規準の尺度になりつつあるため(e.g., Fraley et al., 2000)、本研究では新たに一般他者版ECRを作成する。なお、ECRは、RSQや大石らがMAQを作成する際に踏まえた尺度を考慮した上で作成されている。

しかし、愛着スタイル尺度の場合、愛着スタイルは、理論的に、特定対象(e.g., 恋人, 配偶者)との間で形成されると仮定されている(Bowlby, 1973)。そのため、被験者は求められれば一般他者についての評定をすることが可能かもしれないが、実際の評定では特定の愛着対象を念頭においている可能性も否定できない。

実際、Kato (2001)は、特定対象についてRQに回答を求め、その対象ごとに4つの愛着スタイル群の割合を算出した。その結果、親と恋人・親友とは異なるパターンを示していた。

もし、被験者が一般他者ではなく特定対象を想起しながら評定を行っているとするならば、Kato (2001)の結果のように、4つの愛着スタイル群の割合は対象に応じて異なるパターンを示すであろう。この場合、一般他者を想定させての評定が成立しない可能性を示唆することになり、一般他者を想定させた測定の妥当性も疑わしくなるであろう。

逆に、もし被験者が特定の誰かを想起して回答したと自由記述などにより報告したとしても、その対象ごとの愛着スタイルの度数分布のパターンが同じであれば、一般他者を何らかの形で想起して、それに対して回答を行っている可能性が高いと考えられよう。そこで、本研究では、この2つの対立する可能性を検討し、愛着スタイル尺度での評定対象を一般他者とするものの妥当性を検証する。

最後に、RQ-GOについては、再テスト法による信頼性が検討されていない。そこで、本研究ではこの点も合わせて検討する。

研究 1

研究1の目的は、次の3つである。すなわち、ECR-GOを作成し、(1)信頼性(内的整合性、ECRとの因子比較を通して)、(2)妥当性(理論的に関連がある尺度との相関関係を通して)を検討する。最後に、(3)一般他者を想定させた測定の妥当性を検討する。具体的には、4つの愛着スタイル群の割合のパターンが、ECR-GOやRQ-GOを評定する際に一般他者として想定された人物の種類ごとに異なるかどうかを検討する。

(2)の妥当性を検討するにあたり、2つの理論的前提にもとづき2つの仮説を検証する(cf. 中尾・加藤, 2002)。というのは、Brennanらは、ECRを開発するにあたり、2次元・4分類愛着スタイルモデル(脚注3参照)を仮定していた。そのため、Brennan et al. (1998)に従い、4分類を仮定することに伴う2つの仮説(第2)、また2次元を想定することに伴う2つの仮説(第1)を検証する。以下に具体的に述べる。

第1に、ECR-GOは愛着場面での自己観や他者観を反

映すると想定されている。とするならば、ECR-GOの“見捨てられ不安⁹⁾(Anxietyと略す)”は、他の愛着スタイル尺度(e.g., RQ-GO)により測定される自己観だけでなく、愛着場面に限定されないより一般的な自己観(e.g., 自尊感情尺度; Rosenberg, 1965)とも負の相関があると予測される。同様に、ECR-GOの“親密性の回避(Avoidanceと略す)”は、愛着スタイル尺度(e.g., RQ-GO)により測定される他者観だけでなく、より一般的な他者観(e.g., 他者観尺度; 加藤, 1999)とも負の相関があると予測される。

第2に、ECR-GOは4つの愛着スタイル群を反映すると想定されている(脚注3参照)。とするならば、ECR-GOは、RQ-GOにより分類される4つの愛着スタイル群の特徴を反映しているだろう。つまり、自己観がネガティブなとらわれ型や恐れ型は、自己観がポジティブな安定型や拒絶型に比べて、Anxietyが高いであろう。また、他者観がネガティブな拒絶型や恐れ型は、他者観がポジティブな安定型やとらわれ型に比べて、Avoidanceが高いであろう。

方 法

被験者 被験者は大学生378名(平均年齢18.9歳; 男104名, 女269名, 無記入5名)であった。

質問紙 質問紙は、フェイスシート(学部, 学年, 年齢, 性別, 現在の恋人の有無)と次の4種類の尺度から構成された(計6尺度)。すなわち4分類愛着スタイル尺度(ECR-GO, RQ-GO), 一般他者についての自由記述(ECR-GOとRQ-GOそれぞれに対して), 自尊感情尺度(Rosenberg, 1965), 他者観尺度(加藤, 1999)の4つである。以下の尺度の評定は全て, 7件法(1=“全く当てはまらない”から7=“非常によく当てはまる”)を用いた。

4分類愛着スタイル尺度(1) ECR-GOを用いた。ECR-GOは、一般他者に対する愛着スタイルを構成する2因子を測定するための多項目式尺度(36項目)である(教示と項目はTable 1とTable Aを参照)。ECRでは、恋愛関係で現れる愛着スタイルを測定するため、愛着対象として“恋人”が用いられた(Brennan et al., 1998, 中尾・加藤(2002)訳)。しかし本研究では、愛着対象として“一般他者”を想定しているため、“恋人”の代わりに“人”という言葉を用いた。それに伴い、項目に若干の修正・追加を行った(例えば、ECRの項目番号

18の“私には恋人が私を愛してくれているということを何度も何度も言ってくれることが必要だ”は、ECR-GOでは“私には、人が私に対して好意的であるということを何度も何度も言ってくれることが必要だ”へと変更した)。

4分類愛着スタイル尺度(2) RQ-GO(Bartholomew & Horowitz, 1991, 加藤(1998/99)訳)を用いた。RQ-GOは、一般他者に対する4分類愛着スタイルを測定するための強制選択式尺度である。被験者に一般他者を念頭におきながら回答を行ってもらうために、“あなたが、いろいろな人間関係の中で経験する「人に対する感じ方や考え方」には、一般的に次のような4つのタイプがあるとされています。あなたはそれぞれのタイプにどのくらいよくあてはまりますか。”という教示を行った。回答に際し、被験者は4つの愛着スタイルの特徴が記述してある文章を読み、それぞれについて自分にどのくらいよく当てはまるかを7件法で評定した。次に、その4つの中から最もよく当てはまる愛着スタイルを1つ選択した。

RQ-GOの使い方には2つの方法がある。1つは4つの記述への自己評定を用いて自己観得点と他者観得点をそれぞれ算出する方法である(Table 2参照)。もう1つは最後に1つ強制選択させたものによりその人の愛着スタイルを決定する方法である(強制選択にもとづく4つの愛着スタイル群の割合はTable 3参照)。

一般他者についての自由記述 被験者は、ECR-GOとRQ-GOについての評定をそれぞれ行った後、次の教示に対して自由記述による回答を行った：あなたは先ほどの文章に出てきた「人」のところで誰を思い浮かべましたか。思い浮かべた人すべてを()に記入して下さい(例：母, 恋人, 友人, 誰も思い浮かべなかった, など)。

自尊感情尺度(Rosenberg, 1965) この尺度は、自己について全般的にどのような見方をしているのかを測定するための尺度(10項目)である。

他者観尺度(加藤, 1999) この尺度は、他者について全般的にどのような見方をしているかを測定するための尺度(19項目)である。また、この尺度は、“他者は援助的・よいもの”と“他者は悪、信用できない”の2因子から構成される。

なお、中尾・加藤(2002)と同様に、第1因子のみを分析の際に用いた。その理由は、第2因子は他者についての“信用の有無”の因子であるが、愛着の他者観とは“他者が援助や保護を与えてくれるかどうか(Bowlby, 1973, p.204)”であり、その両者は必ずしも関連するとは限らないからである(e.g., 信用できる人が援助や保護を与えてくれないこともある)。

⁹⁾ Brennan et al. (1998) が2因子をこのように命名したのは、2次元・4分類愛着スタイルモデル(脚注3)について、“自己観がポジティブである”ということは“愛着対象から見捨てられるかもしれないという不安が低い”ということであり、“他者観がポジティブである”とは、“愛着対象との親密な関係を回避しない”ということであると考えたためである。

Table 1
ECR-GO の因子分析結果 (最小2乗法・バリマックス回転) (N=356)^{a)}

項目	F1	F2
F1: “見捨てられ不安 (Anxiety)”, $\alpha=.90$, 男女込み=3.78(.99) ^{b)} , 男=3.70(1.05), 女=3.81(.97)		
14. 私は一人ぼっちになってしまうのではないかと心配する.	.73	.25
22. 私は, (知り合いに) 見捨てられるのではないかと心配になることはほとんどない. (R)	.69	.27
08. 私は, 知り合いを失うのではないかとけっこう心配している.	.67	.26
06. 私が人のことを大切に思うほどには, 人が私のことを大切に思っていないのではないかと私は心配する.	.63	.22
04. 私は, いろいろな人との関係について, 非常に心配している.	.62	.24
02. 私は, 見捨てられるのではないかと心配だ.	.62	.25
16. 私が人ととても親密になりたいと強く望むがために, ときどき人はうんざりして私から離れていってしまう.	.61	-.01
32. 私は, 人が必要なときにいつでも私のためにいてくれないとイライラする.	.61	-.13
12. 私があまりにも気持ちの上で完全に一つになることを求めるがために, ときどき人はうんざりして私から離れていってしまう.	.61	.01
18. 私には, 人が私に対して好意的であるということを何度も何度も言ってくれることが必要だ.	.60	-.11
30. 私は, 私がいてほしいと望むぐらいに人がそばにいてくれないと, イライラしてしまう.	.59	-.19
24. 私は人に自分のことを好きになってもらうことができなかつたら, 私はきっと気が動転して, 悲しくなったり腹が立ったりする.	.55	-.12
26. 私が親密になりたいと望むほどには, 人は私と親密になりたいと思っていないと私は思う.	.55	.14
28. 私は誰かとつき合っていないと, 何となく不安で不安定な気持ちになる.	.48	-.19
10. 私はいつも, 人が私に対していてくれる気持ちが, 私が人に対していてくれる気持ちと同じくらい強ければいいのになあと思う.	.47	-.09
20. 私は, 人にもっと自分の感情や自分たちの関係に真剣であることを示させようとしているのを感じる事がときどきある.	.47	-.23
34. 人にダメだなあと言われると, 自分は本当にダメだなあと感じる.	.40	.03
36. 私は, 知り合いが私のことをほっといて自分一人で何かをすることが重なってくると腹が立ってきてしまう.	.40	-.01
F2: “親密性の回避 (Avoidance)”, $\alpha=.83$, 男女込み=3.61(.95), 男=3.74(.92), 女=3.55(.96)		
25. 私は, 人に何でも話す. (R)	-.14	.66
15. 私は, 心の奥底にある考えや気持ちを人に話すことに抵抗がない. (R)	-.05	.64
27. 私はたいてい, 人と自分の問題や心配ごとを話し合う. (R)	-.26	.62
29. 私は人に頼ることに抵抗がない. (R)	-.10	.58
31. 私は, 人になぐさめやアドバイス, 助けを求めることに抵抗がない. (R)	-.13	.58
09. 私は人に心を開くのに抵抗を感じる.	.27	.57
01. 心の奥底で何を感じているかを人にみせるのはどちらかというと好きではない.	.06	.52
23. 私は人とあまりに親密になることがどちらかというと好きではない.	.13	.49
17. 私は人とあまり親密にならないようにしている.	.15	.47
03. 私は, 人と親密になることがとてもこちよ. (R)	-.10	.44
19. 私は比較的容易に人と親密になれると思う. (R)	.19	.40
21. 私は, 自分が人に依存することをゆるすことがなかなかできないと思う.	.06	.40

^{a)} 因子負荷量は, 全体の36項目から6項目を除いた計30項目についての因子分析結果にもとづいている. 項目番号は, Brennan et al. (1998) の表と同じである. また, (R)は逆転項目である.

^{b)} 数字はそれぞれ, 男女込み, 男のみ, 女のみの場合の平均値 (SD) を示す.

Table 2
ECR-GO と自尊感情尺度、他者観尺度、RQ-GO の自己観得点や他者観得点との相関係数^{a)}

サブ・スケール	ECR-GO	
	Anxiety	Avoidance
“自尊感情”	-.42 **	-.18 **
“自己観得点” ^{a)}	-.65 **	-.28 **
“他者は援助的・よいもの”	-.08	-.40 **
“他者観得点” ^{a)}	-.06	-.66 **

^{a)} ** $p < .01$ である。

^{a)} 自己観得点=(安定型+拒絶型) - (とらわれ型+恐れ型) (Griffin & Bartholomew, 1994, p.29)

^{a)} 他者観得点=(安定型+とらわれ型) - (拒絶型+恐れ型) (Griffin & Bartholomew, 1994, p.29)

Table 3
RQ-GO における ECR-GO の平均値 (SD)^{a)}

		安定型 (N=96)	拒絶型 (N=19)	とらわれ型 (N=177)	恐れ型 (N=79)	F
Anxiety	M	3.09c	3.15c	4.22a	3.80b	$F(3, 367) = 37.65^{**}$
	(SD)	(.77)	(.67)	(.85)	(1.06)	
Avoidance	M	3.08c	4.19a	3.44b	4.51a	$F(3, 367) = 55.38^{**}$
	(SD)	(.78)	(.73)	(.82)	(.75)	

^{a)} Tukey の HSD 検定による多重比較の結果は、英語小文字の異同により示した。すなわち、5%水準で有意差があった場合には異なった文字 (e.g., a と b)、有意差がなかった場合には同じ文字 (e.g., a と a) により結果を示した。また ** $p < .01$ である。

結果と考察

ECR-GO の信頼性と妥当性 ECR-GO の36項目について、ECR と同様に2因子解で最小2乗法・プロマックス回転による因子分析を行ったところ、因子間相関が.12であった。そのため、再度、最小2乗法・バリマックス回転による因子分析を行った。固有値が、第1因子から順に、7.81, 5.41, 2.40, 1.71, 1.41, 1.23であったため、2因子解が適当であると判断した。そして、解釈可能性という観点から、6項目を削除した30項目が適当であると判断した (30項目についての因子分析結果は Table 1 に、教示や削除した項目は Table A に示した)。2因子による累積説明率は34.64%であった。Brennan et al.(1998) に従い、第1因子を“見捨てられ不安 (Anxiety)”，第2因子を“親密性の回避 (Avoidance)”と命名した。また、高い内的整合性 (α 係数) が得られた (Table 1)。

ECR-GO の因子的妥当性を確認するために、ECR-GO と日本語版 ECR (中尾・加藤, 2002) の因子分析結果

について、因子の構造がどの程度類似しているのかを検討する。因子の構造が同じであることを示すためには、2つの尺度の各因子における因子負荷量がどの程度比例しているのかを示す必要がある。そのため、ピアソンの相関係数 (r) によりこの点を検討した (詳細は、M. S. レビン (1984) 参照)。その結果、第1因子と第2因子の両方で、因子負荷量には高い負の相関があった (第1因子: $r = -.86$, 第2因子: $r = -.78$)¹⁰⁾。このことにより、ECR-GO は、ECR とは第1因子と第2因子の順序が逆転するが、因子の構造は類似していることが示された。そのため、ECR-GO には、因子的妥当性があると言える。

したがって、ECR-GO には、信頼性 (内的整合性と因子的妥当性) があることが確認できたと言える。なお、ECR-GO の2尺度の平均値に性差や恋人の有無による差異があるかどうかを、 t 検定により検討したところ、有意差はなかった (性別ごとの平均値は、Table 1 参照)。

次に、先行研究に従い、各尺度の得点を算出した。すなわち、自尊感情得点は Rosenberg (1965)、“他者は援助的・よいもの”得点は加藤 (1999)、RQ-GO の自己観得点や他者観得点は Griffin & Bartholomew (1994) に従い、算出した。その後、ECR-GO の2尺度の得点とこ

¹⁰⁾ ECR-GO では第1因子が Anxiety、第2因子が Avoidance となるのに対して、ECR では、逆に、第1因子が Avoidance、第2因子が Anxiety となった。そのため、 r の符号が負となった。

Table 4
一般他者として想定された人物のカテゴリー（数字は、研究1での複数回答を含む全反応の頻度）

カテゴリー	反応例	ECR (%)	RQ (%)
・友人	友人, 友達, 友人 (男女とも), 親友	361 (58.99)	337 (71.25)
・恋人	恋人, 彼氏, 彼女, 元恋人	109 (17.81)	63 (13.32)
・家族	家族, 母, 父, 姉, 妹, きょうだい	85 (13.89)	23 (4.86)
・先輩	先輩, 先パイ	14 (2.29)	7 (1.48)
・好きな人	片思いの人, 好きな人	9 (1.47)	6 (1.27)
・知人	知人, バイト先の人, クラスメイト	7 (1.14)	6 (1.27)
・誰も思い浮かべなかった	誰も思い浮かべなかった, 誰も思い浮かべていない	7 (1.14)	19 (4.02)
・一般他者	自分を取り巻く全ての人, 自分と関係がある人全て	6 (.98)	3 (.63)
・先生	先生, 恩師	5 (.82)	3 (.63)
・他人	不特定人物 (他人), 初対面の人	3 (.49)	4 (.85)
・その他	仮の場面の人, 年上の人, 異性	6 (.98)	2 (.42)

Table 5
ECR-GO と RQ-GO における想定された人物の種類 (友人, 恋人, 家族) のクロス表集計^{a)}

ECR-GO	友人	恋人	家族	友/恋	友/家	友/恋/家	単数	複数	合計
安定型	45(24.5)	0	0	24(27.9)	16(25.0)	10	45(24.5)	50(29.4)	95(26.8)
拒絶型	10(5.4)	0	0	4(4.7)	1(1.6)	2	10(5.4)	7(4.1)	17(4.8)
とらわれ型	92(50.0)	0	0	38(44.2)	30(46.9)	6	92(50.0)	74(43.5)	166(46.9)
恐れ型	37(20.1)	0	0	20(23.3)	17(26.6)	2	37(20.1)	39(22.9)	76(21.5)
合計	184(100)	0	0	86(100)	64(100)	20	184(100)	170(100)	354(100)
RQ	友人	恋人	家族	友/恋	友/家	友/恋/家	単数	複数	合計
安定型	66(24.9)	2	0	14(28.6)	5	3	68(24.9)	22(31.4)	90(26.2)
拒絶型	10(3.8)	1	0	3(6.1)	1	0	11(4.0)	4(5.7)	15(4.8)
とらわれ型	131(49.4)	1	1	25(51.0)	7	2	133(48.7)	34(48.6)	167(48.7)
恐れ型	58(21.9)	3	0	7(14.3)	2	1	61(22.3)	10(14.3)	71(20.7)
合計	265(100)	7	1	49(100)	15	6	273(100)	70(100)	343(100)

^{a)} N(%)である (頻度の合計が20以下の場合には%を省略). また, 友/恋, 友/家, 友/恋/家は, それら (e.g., 友人と恋人) の複数回答を示す. なお, “単数” = 友人 + 恋人 + 家族, “複数” = 友/恋 + 友/家 + 友/恋/家である.

これらの尺度得点の相関係数を算出した (Table 2)。その結果, Anxiety は自尊感情得点や RQ-GO の自己観得点と負の相関があり, そして Avoidance は “他者は援助的よいもの” 得点や RQ-GO の他者観得点と負の相関があることが示された。このことから, ECR-GO は, 自己観や他者観と理論的に関連のある尺度との間に妥当性があると言える。

また, ECR-GO の2尺度の値それぞれについて, RQ-GO により分類される4つの愛着スタイル群間で差異があるかどうかを, 1元配置分散分析により検討した。Anxiety については愛着スタイルの主効果が有意であったため, Tukey の HSD 検定による多重比較を行った

(Table 3 上側)。その結果, 自己観がネガティブなとらわれ型や恐れ型は, 自己観がポジティブな安定型や拒絶型に比べて, Anxiety 得点が有意に高かった。

Avoidance についても愛着スタイルの主効果が有意であったため, Tukey の HSD 検定による多重比較を行った (Table 3 下側)。その結果, 他者観がネガティブな拒絶型や恐れ型は, 他者観がポジティブな安定型やとらわれ型に比べて, Avoidance が有意に高かった。これらのことは, Brennan et al. (1998) の結果が再現されたことを示す。つまり, 2次元・4分類愛着スタイルモデルにおける4つ分類の特徴が ECR-GO に反映されるという点からも, ECR-GO に妥当性があることが示された。

一般他者として誰が想定されているのか ECR-GO と RQ-GO において、一般他者として誰が想定されたのかについての自由記述の分類を行った。まず、全反応を11カテゴリーに分類した (Table 4)。これら11カテゴリーのうちの友人、恋人、家族の3カテゴリーで ECR-GO では全反応の90.80%、RQ-GO では全反応の89.62%をカバーすることができた。そこで、以下の分析ではこれら3つのカテゴリーを用いた。なお、同じカテゴリーについての複数回答は、1つのカテゴリー (頻度1) とした (例えば、母親、姉という反応は、家族 (頻度1) とした)。

ECR-GO および RQ-GO について回答する際に想定していた人物の種類8つと RQ-GO で決定した4つの愛着スタイル群とのクロス表集計を行った (Table 5)。その結果、想定していた人物の種類 (やその数) に関わらず、4つの愛着スタイル群の度数分布の割合パターンは、8つの人物の種類ではほぼ同じであった。このことは、Kato (2001) の結果からの予想とは、全く異なるものであった。そのため、一般他者について愛着スタイル尺度に回答を求めたとき、具体的な対象 (母、恋人) を想定しながら回答しているのではなく (問われれば特定他者を報告してはいたが)、むしろ何らかの“一般他者”を想定しながら回答している可能性が高いことを示唆するものと解釈できる。言い換えると、愛着スタイル尺度において、一般他者を想定させた測定には妥当性があると言える。

以上の結果を整理すると、次のようになる。すなわち、ECR-GO の信頼性と妥当性は確認できたと言える。また、ECR-GO や RQ-GO は、一般他者として誰が想定されようとも、特定対象ではなく一般他者についての愛着スタイルを測定している可能性が高い。

研究 2

研究 2 の目的は、ECR-GO と RQ-GO の信頼性を再テ

スト法により検討することである。具体的には、調査を2回実施し (期間は1ヶ月)、(1) 2回目の調査での ECR-GO の2尺度の値、RQ-GO の自己観得点や他者観得点について相関係数を算出する。次いで、(2) RQ-GO による4つの愛着スタイル群の一致率を算出する。

方 法

被験者 被験者は、研究1とは異なる女子大学生72名 (平均年齢20.2歳) であった。

質問紙 質問紙は、フェイスシート (学年、年齢) と2つの愛着スタイル尺度 (ECR-GO と RQ-GO) により構成された。なお、後者の2つの尺度は、研究1で用いたものと同じである。

調査時期 第1回目の調査は、2002年11月20日に実施し、第2回目の調査は、2002年12月18日に実施した。両調査間の期間は1ヶ月であった。

結果と考察

研究1の因子分析結果にもとづき、1回目と2回目の調査での ECR-GO の2尺度値をそれぞれ算出した。また、それぞれについて α 係数を算出した結果 (Table 6)、研究1と同様に高い内的整合性が得られた。

ECR-GO の再テスト信頼性を検討するために、2回の調査での ECR-GO の2尺度の値の相関係数を算出した (Table 6 の左側)。その結果、ECR-GO は1ヶ月という期間においては、再テスト信頼性が高いことが示された。

次に、RQ-GO の再テスト信頼性を検討するために、2回の調査での自己観得点や他者観得点の相関係数を算出した (Table 6 の左側)。その結果、RQ-GO の自己観得点や他者観得点は1ヶ月という期間においては、再テスト信頼性が十分あることが示された。

また、RQ-GO の4つの愛着スタイル群における2回の調査での一致率を算出した (Table 7)。その結果、4

Table 6
2回目の調査での ECR-GO, RQ-GO の尺度得点の相関 ($N=70\sim 72$)^{b)}

	ECR-GO		RQ		
	1回目	Anxiety ($\alpha = .93$)	Avoidance ($\alpha = .82$)	自己観得点	他者観得点
2回目					
Anxiety ($\alpha = .94$)		.92 **	-.17	-.62 **	.24 *
Avoidance ($\alpha = .82$)		-.08	.74 **	-.16	-.65 **
自己観得点		-.71 **	-.05	.67 **	-.08
他者観得点		.10	-.51 **	.13	.56 **

^{b)} * $p < .05$, ** $p < .01$ である。

Table 7
RQ-GOの4つの愛着スタイル群の時間的安定性(4分類全体の一致率=67.16%)

2回目 \ 1回目	安定型	拒絶型	とらわれ型	恐れ型	合計
安定型	13	1	2	4	20 (29.85%)
拒絶型	0	2	0	1	3 (4.48%)
とらわれ型	2	0	18	6	26 (38.81%)
恐れ型	1	2	3	12	18 (26.87%)
合計	16 (23.88%)	5 (7.46%)	23 (34.33%)	23 (34.33%)	67

分類の全体の一致率は67.16%であった。なお、安定型とそれ以外という2分類での全体一致率は、85.07%であった。カッパ係数を算出したところ、4分類では.53、2分類では.62であった。カッパ係数は、.61以上であれば十分に一致度があると考えられているため(Landis & Koch, 1977)、後者の値は信頼性が十分であることを示すと言えよう。4分類の時間的安定性については、単一項目により測定されるため不安定である可能性があるため、今後さらなる検討が必要であろう¹¹⁾。

以上のことから、ECR-GOやRQ-GO(自己観得点、他者観得点、2分類)は、1ヶ月という期間においては、再テスト信頼性があることが示されたと言える。なお、研究2では女性のみを対象として調査を実施したため、今後は男性においてもECR-GOやRQ-GOの再テスト信頼性を検討する必要がある。

引用文献

- Bartholomew, K., & Horowitz, L. M. 1991 Attachment styles among young adults: A test of a four-category model. *Journal of Personality and Social Psychology*, **61**, 226-244.
- Bowlby, J. 1973 *Attachment and loss*. Vol.2. *Separation: Anxiety and anger*. New York: Basic Books.
- Brennan, K. A., Clark, C. L., & Shaver, P. R. 1998 Self-report measurement of adult attachment: An integrative overview. In J. A. Simpson & W. S. Rholes (Eds.), *Attachment theory and close relationships*. New York: The Guilford Press. Pp.46-76.
- Fraley, R. C., Garner, J. P., & Shaver, P. R. 2000 Adult attachment and the defensive regulation of attention and memory: Examining the role of preemptive and postemptive defensive processes. *Journal of Personality and Social Psychology*, **79**, 816-826.
- Griffin, D. W., & Bartholomew, K. 1994 The metaphysics of measurement: The case of adult attachment. In K. Bartholomew & D. Parfman (Eds.), *Advance in personal relationship*, **5**, Attachment process in adulthood. London: Jessica Kingsley Publishers Ltd. Pp.17-52.
- Hazan, C., & Shaver, P. 1987 Conceptualizing romantic love as an attachment process. *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**, 511-524.
- 金政祐司・大坊郁夫 2003 青年期の愛着スタイルと社会的適応性. *心理学研究*, **74**, 466-473.
- 加藤和生・丸野俊一 1997 議論スキルや態度を育む要因の探索: 家庭での議論と愛着スタイルの観点から. *認知・体験過程研究*, **6**, 59-71.
- 加藤和生 1998/99 Bartholomewらの4分類成人愛着尺度(RQ)の日本語版の作成. *認知・体験過程研究*, **7**.
- 加藤和生 1999 “甘え”に関する認知・人格/社会心理学的観点からの総合的アプローチ. *科研・基盤研究(C-2)一般(課題番号: 13410039)*.
- Kato, K. 2001 Concordance of attachment and amae to multiple figures in Japanese college students. Poster presented at the 13rd Annual Meeting of American Psychological Society, Toronto, Canada.
- 北村俊則・竹内美香・岸田泰子・蓮井千恵子 2002 Bowlby理論とアダルト・アタッチメント. *季刊精神科診断学*, **13**, 297-309.
- 丸山理恵 1998 女子学生の愛着と自己信頼・他者信頼. *日本発達心理学会第9回大会発表論文集*, 310.
- M. S. レビン. 柳井春夫・新田裕史(訳) 1984 人間科学の統計学9 多変量相関分析の方法 朝倉書店 (Levine, M. S. 1977 Canonical analysis and factor comparison. London: SAGA Publications.
- Landis, J. R. & Koch, G. G. 1977 The measurement of observer agreement for categorical data. *Biometrics*, **33**, 159-174.

¹¹⁾ Scharfe & Bartholomew (1994) では、8ヶ月という期間において、RQ-GOの4つの愛着スタイル群の一致率は62.50%であった。

中尾達馬・加藤和生 2002 成人愛着スタイル尺度 (ECR) の日本語版作成. 九州大学人間環境学府心理学教室 (未公刊).

中尾達馬・加藤和生 2003 成人愛着スタイル尺度間にはどのような関連があるのだろうか? : 4 カテゴリー (強制選択, 多項目式) と 3 カテゴリー (多項目式) との対応性. 九州大学心理学研究, 4, 57-66.

大石史博・宇恵弘 1999 成人用愛着質問紙法作成の試

み. 関西女子短期大学紀要, 9, 59-67.

Rosenberg, M. 1965 *Society and the adolescent self-image*. Princeton Univ. Press.

Scharfe, L. & Bartholomew, K. 1994 Reliability and stability of adult attachment patterns. *Personal Relationships*, 1, 23-43.

和田さゆり 1996 性格特性用語を用いた Big Five 尺度の作成. 心理学研究, 67, 61-67.

付 録

Table A
Table 1 に記載されていない 5 項目^{a)}

-
07. 私は、人が自分に対して非常に親密になりたがってくると、いごこち悪く感じる。
05. 人が私と親密になろうとするやいなや、私はその人から距離をとろうとしている自分に気づく。
11. 私は人と親密になりたいのだが、いつの間にかついつい後ずさりしていることが多い。
13. 私は人があまりに自分と親密になってくると、とてもイライラしてしまう。
33. 困ったとき人に助けを求めると、何かちょっとは (状況が) 良くなる。(R)^{b)}
35. 私は、なぐさめやはげましなど、いろんなことで助けを求める。(R)
-

^{a)} 教示は次の通りであった：以下には、いろいろな人が対人関係の中でどのような気持ちを持つかについての文があげてあります。それぞれの文は、「あなたが普通の対人関係の中で一般的に体験している気持ちや感じ方」に、どのくらいよく当てはまりますか。現在の対人関係での経験だけでなく、いろいろな対人関係の中であなたが普通によく体験していることを思い浮かべながら、それぞれの文について下の 7 件尺度を用いて評定してください。回答は、それぞれの文の右にある評定尺度上のもっとも当てはまる番号に○印をつけてください。下線は真ん中です。

全く当てはまらない 1—2—3—4—5—6—7 非常によく当てはまる

^{b)} (R) は逆転項目である。